



TITLE:

南十字星3題

AUTHOR(S):

高濱, 虚子; 大口, 周作; 田村, 白桐

CITATION:

高濱, 虚子 ...[et al]. 南十字星3題. 天界 1939, 19(216): 171-173

ISSUE DATE:

1939-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167796>

RIGHT:



南十字星 3 題

高濱虚子・大口周作・田村白桐

箱根丸から

私が南支那海を南へ南へと日を重ねて航するに従つて、暑さが段々と増して來た。密雲が空を蔽ふてゐた連日の不愉快な天氣が急にカラリと晴れて、日本の眞夏のようになつた日であつた。甲板を掃除してゐる水夫達も、一齊に白服になつて、いつもよりは輕快に立働いてゐるように見えた。洗ひ清められた甲板に、白墨でデツキ・ゴルフの丸や直線を描いて行くデツキ・ボーイも、爽かな氣分に眺められた。

右舷の方に立つと、今まで何日かの間見ることができなかつた支那の大陸が洋上遙かに見えて來た、是は安南のカムラン灣の見當であらうとのことであつた。乗客も、大方甲板に現れて、互に挨拶を交し、手摺に凭れて、この安南の一端の陸地を眺めてゐた。が、見てゐる中に、その大陸の一角も段々と後に遠去かつて行つて、遂に水天彷彿の間に見えなくなつてしまつた。

午後にまた、左舷に一つの島が見え初めて來た。其は、なだらかな丘を持つてゐる、かなり大きな島で、その丘の中腹には畑と覺しきものが少しばかり見えてゐて、此島には人家のあることが想像された。大洋の眞中にあるこの島に住んでゐる人の、さびしい、吞氣な生活を想像して見たりした。

楠窓君の話に、昨朝 70 度の温度であつた海水が、昨夜は 80 度になつてゐるといふ事であつた。空氣の温度は、海水の温度とほぼ似よつたものださうで、現に私の部屋の寒暖計が 82~83 度を示してゐた。

晩食の時分に、傍らの楠窓君に「南十字の星は未だ見えませんか」と聞くと、楠窓君は「さあ、もうそろそろ見えるでせう、1 等運轉士にそう云つて、よく見える時分に知らせて貰ふ事にしませう」と、そう云つて、メニウの裏にその事を書いて、ボーイに 1 等運轉士の食卓に持たしてやつた。1 等運轉士からは「もう見える筈ですから、後刻御知らせに参りませう」と云ふ返事が來た。

ゆつくり晩食を済ませて型の通り暫く雑談してから「まだ運轉士からは何と

も云つて来ませんが、ともかく上に昇つて見ませう」と楠窓君が云つたので、横光君と私ら親子の、そのテーブルに居たものは、楠窓君 後に蹤いて、食堂の外に出た。そこには3~4人の人が立つてゐて、其等の人もまた、私等が南十字星を見に行くと言ふ事を傳へ聞いて、ぞろぞろと蹤いて来た。

8・9人の人は、A甲板からさらに階段を昇つて、ボートデツキの、棧橋の真下の處に行つて見た。南の方を見渡すと、水平線近くには、うつすらと雲が掛つてゐて、とてもこの具合では十字星は見えそうには思へなかつた。そこへ一等運轉士が来て「23時から2・3時頃までの間は、雲も晴れて星もよく見える時分であらうと思ひます」と云つた。

赤道近くに来たことによつて、南十字星が見えると云ふ事に興味を持つて集まつた人々は、小さい失望を感じたらしかつたが、晴れてゐる中天の星を仰いで、その寶石の如き耀きを持つた大きな星の光を見て、何れも驚嘆の聲を發するのであつた。中にも爛々と大きく輝いてゐる1つの星を指して「あれは何と云ふ星ですか」と聞くと、シリウスと答えた。またオリオン星座も美しい光を放つてゐた。北斗七星は此邊からは、もう見えないと云ふ事であつた。(虚子)

硫黄島にて

戸外は眞暗である、蚊遣火を焚き乍ら團扇を使ひ、旅の人々と島の話をしてゐる、夕食に傾けた島酒の故か話がはづむ。

ランプの光が時々星の様に瞬きする。太陽と共に起き出で、太陽と共に休む島の生活、此處では時計なんかは不必要らしい。太陽を時計としてゐる島の人々は都會人等は及びもつかない程太陽を愛する、我々と同様天文同好者達である。

22時提灯を持つて戸外に出る。同宿の山田さん、島の青木さん、共に私、パイアとガジマルの林を抜けて島の一番高い場所を目指す、雲ならば砂埃の立つのも見えよう、足も焼けつく火山灰は歩き難い。

島全體に漂ふてゐる硫黄の臭が鼻をつく、空を見上げては危い様な崖道、それでも時々立停まつて星を見る。北極星が低く24度に掛かつて鳥星座が高く、オリオンは西に横たはつてゐる、硫黄臭い崖をよちる、海面より106米、島の

高臺に昇つた、先づ北極星を背に向けて南を見た、鳥の下に！見えた、生れて初めての南十字、所謂キリストの心臓も微かなら見える。地平線上2度位の高さだから大氣の爲1等星が3等星位にしか見えない。22時半、南十字は南中してゐる、北十字(白鳥)よりは十字架らしく見える、ジツト見つめる。南十字の左の方に1等星2ツ、 $\alpha \cdot \beta$ ケンタウル、南十字や $\alpha \cdot \beta$ ケンタウルは大阪や東京では金輪際見えない、その爲この夜道をわざわざ出て來た事を話すと鳥の青木さんは大變この島に棲んでゐる事を喜んでゐた。

カノープスでさえ見兼ねた私が、南十字や $\alpha \cdot \beta$ ケンタウルを見る事ができた喜びを青木さん以上にしみじみ感じる。南方方面だけを茫然と見續けること一時、いつの日再び此星に見えたらうか、立ち去り兼ね立ち去り兼ねして夜半過ぎ南十字も横はつた頃崖を下る、(周作)

「銀河」隨筆の一節

赤緯60度あたり銀河の石炭叢と云はれる暗黒な場所の横に、菱形の $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma \cdot \delta$ の4星より成る南十字星、16~17世紀頃の航海者等はキリストの聖なる姿をこの銀の十字に見て敬虔なる祈りを捧げたと云ふ星々よ！さては日本の八幡船、御朱印等の船夫等も南十字星にて方向を定めたであらう。

トレミーの「アルマゲスト」、バイエルの「ウラノメトリア」等々はケンタウル座とされて居り、1679年フランスのロワイエに到つて始めて十字架座となつた。ダンテの「神曲」煉獄篇、サン・ピエルの小説「ボオルとイルヂニイ」にも出て來るし、日本では「天竺徳兵衛物語」には「大くする」、「小くする」と呼ばれ、池田好運の「元和航海記」には俱留^{クニヰ}^{リウ}と書かれて居た。(白桐)

Super Nova また發見される

急報第263號で報じた事のある Zwicky 氏は本年一月17日又も N.G.C. 4636 星雲中に超新星を發見した。該星雲は赤經 $12^h 3^m 26^s$ 赤緯北 $3^\circ 25.6'$ (1855.0年分點) にあり、超新星は發見當日の光度は14等、20日には12.5等となつた。

[急報 345]